



10月の行事報告 October

中原寺文化講演会に参画して

第29回中原寺文化講演会は、去る10月21日、講師に日本子守唄協会理事長の西館好子さんをお迎えし、「仏教・時代・子守唄 子守唄からみえてきた時代」の講題で開かれた。

講演の前半部分では、自己紹介的な部分や、子守唄への取り組みを始めたいと九州へ専門家を訪ねたとき、「自分が知らない子守唄を10曲集めたら教えてあげる」といわれ、必死になって全国の子守唄を調べた、とのエピソードなど“いかにも”という感じで面白かった。西館さんの類いまれなる意志力、行動力と探究心、好奇心が終には協会を立ち上げるまでに至ったとよく判った。

後半部では、日本全国、世界各地へと活動を広げる中で、子守唄は単に乳幼児を眠りにつかせるための唄にとどまらず、



曲、詞の中に唄う者の心情はもちろん、その置かれている個人及び社会環境を反映しており、奥深い意味と味わいをもっていると語られた。

例えば、五十数番まであるといわれる「五木の子守唄」の詞には、貧しい農家から“口減らし”として子守に出された少女達が、置かれている境遇の中で、いわば即興的に口の端にのぼる言葉が詞となり、心底にある真情を吐露している。また社会的状況を反映しているからこそ、今日まで歌い継がれているのだという。

それぞれの人が与えられた自己の状況に自分自身が納得し、ここから領けるかというなら、決してそうではない。どう考えても不条理だとか思えないことが多い。本田弘之氏が述べられたように、“今”“ここ”“これから”をどのように捉えなおすかに、仏教の教えがあるが故に、今日の講題となったのであろう。

最後に、声楽家による数曲の子守唄(CD)を傾聴して、感激の内に終演となりました。 合掌

(盛田 好一 記)

11月の行事報告 November

はじめての報恩講のお参り

今年の4月に入門の入月 正と申します。

11月20日、21日に浄土真宗では一年で最も大切にしている報恩講に、はじめてお参りをさせて頂きました。

一日目の速夜法要、二日目は6時30分からの早朝おつとめ、日中法要、ご満座法要といわばフルコースでお参りさせて頂き、速夜法要後にあずき粥のお齋を、翌日の早朝法要後は境内で採れた梅干しおにぎりを、そして日中のご満座法要後にも精進料理のお齋と一日中のお食事まで頂戴し、お寺で過ごさせて頂きました。

速夜法要はいつもと違うお経で、何もかも珍しく荘厳な雰囲気でお参りができましたこと大変良かったと思っています。

難しい法話はまだ良くわかりませんが、親鸞聖人の御教えである阿弥陀如来のご本願の「南無阿弥陀仏」という称名念仏の大切さだけは分かりました。

それから法要後のお齋をおいしく頂きましたが、料理をされた婦人会の方々の準備から調理、盛り付けと二日連続でもあり、さぞ大変だったこととお察し致します。

皆様のお蔭とありがたく感謝にたえません。

食前のことばを心で「ご婦人方のおかげにより」と置換えておいしく頂きました。

合せて嬉しかったことは、ご配膳のご婦人から「あずきお粥のアズキは親鸞様が大好きだったのよ」と愛情あふれる説明をして頂きました。前坊守からも親鸞聖人の旅立ちの姿で、杖はゴボウ、笠はシタケと料理の意味を聞けるなど報恩講に相応しいお齋でした。

最後に配膳片付けで一つ残ったミカンを「頂いたら」とご婦人方に勧められて昔、子供の頃に「お七夜のお講」で優しい近所のおばさんに貰ったミカンを思い出したりして、とても温かい思いの残る報恩講でした。

頂いたミカンを自宅の阿弥陀仏に供え、報恩講のご報告をして念仏をしました

(入月 正 記)



編集後記(壮年会だより)：平成29年12月「冬号」会報)

ファミリーパーティー、お盆、子ども合宿で8月が終わりますと急に時間のたつのが早くなるような気がします。今回は、入月さんの新鮮な目でご覧になった“報恩講”の感想を頂きました。来年も皆様の原稿をお待ちしています。

【住・職・閑・話】



先日、本屋にて『母さんごめん、もう無理だ』というタイトルの書籍が目が留まりました。この本は朝日新聞社会部の記者が実際に足を運んださまざまな裁判を傍聴し、事件の背景をまとめたものです。

被害者と被告とその周囲の人間関係や、事件に至るまでの経緯、被告の心情の移り変わりなどニュースだけでは知ることのないことが記されています。

ある裁判では息子を殺めた父親の苦悩が述べられていました。精神障害を患っていた息子が、仕事があまくいなくなったところから家族に家庭内暴力をふるうようになり、警察や主治医や役所に相談するが、何処も家族が思うような対処してくれない。

激しさを増す暴力に父親は、「今の精神医療の社会的仕組みでは、自分たち家族は救えないのではないかと考えるようになり、妻と娘を守るために息子を殺めてしまいます。

人を殺めるという行為を決して肯定するわけではなく、被告は犯した罪を償わなくてはならないことはもちろんですが、どこに相談しても解決せずに追い詰められていた被告を単に人を殺した悪人など一言で片づけられるものではありません。こ

の事件の背景には、現代社会における問題点や状況など様々なことがあるのではないのでしょうか。私たちが生きている社会の中では、法律を破ったり道徳的に問題がある人に対して「悪い人」との烙印がおされまます。そして自分と「悪い人」との間に大きな壁を立てて、自分とは性質の違う人、自分とは関係のない人と相手を指さしているのです。そこには「自分は大丈夫、善い人」という自己評価が働いているのです。

『歎異抄』のなかで、「私の心がよいから私は人を殺さないのではない。縁がないから殺さないだけであって、縁が熟せば、人は百人でも千人でも殺すかもしれない。人は縁によってどのような行いをもしてしまう、そういう存在なのだ」と親鸞聖人は指摘されています。そして縁さえ熟せば私も人を殺してしまうかもしれないと、告白されるのです。ここに、阿弥陀さまの智慧に照らされた自らの姿を自覚し、人間存在の持つ闇を、深い悲しみをもってじっと見つめている親鸞聖人がおられます。いつ何をしでかすか分からない自分が救われる道とは、との視点を決しておぼれずに持ち続けていらっやったのが親鸞聖人です。



中原寺仏教壮年会平成29年度活動を振り返って



今年度は1月28日(土)に平成29年度の壮年会年次総会から始まり、年6回の法座(内2回は婦人会との合同法座)を開催し、勉強をしまりました。

中原寺の年間行事等に参加をし、その行事に関しては会員の皆さんのお手伝いを得て、無事一年間予定していた行事は滞りなく終了できました。

壮年会の個々の行事も法座をはじめとし、5月の中原寺杯グラウンドゴルフ・浄土園収穫祭・天真寺とのグラウンドゴルフ交流会等々、東京教区千葉組仏壮関係の行事等にも積極的に参加をしまりました。

また、壮年会だよりも年3回発行をしまりましたが編集委員には大変ご苦勞をお掛けしたことを感謝しております。

ただ、残念なことは前年度まで編集委員として活躍をさせていただいた高木さんが往生されたことでした。この場をかりてお礼を申し上げたいと思います。

今年度も、入月 正さんと上原 勝哉さんが新規加入され、総勢48名になりました。

これからも、中原寺行事等を通して会員獲得活動に励んでまいりたいと思い、活動をしまります。

私の任期もあと1年を残すこととなりますが、新しいリーダーに来年1年の活動の中でバトンタッチが出来るようにしていきたいと思っています。

1年間ご協力に感謝申し上げて簡単ですが、今年度の報告とさせていただきます。

(壮年会会長 石井 保 記)